卒業生の成長に見る
探究学習の意義
体験談 3

目標とする基準があったからこそ、自身で探究し続け、力を高められた

山梨県立吉田高校　2019年3月卒業

上野有生（ゆうき）　現・寿司職人見習い
後藤大地　現・山梨大学教育学部2年

吉田高校の探究学習　概要

◎吉田高校では、2002年度から、「総合的な学習（探究）の時間」で、富士山や富士吉田市について研究する探究学習「富士山学」を実施している。「自然・環境」「歴史・文化」「防災」「文学・芸術」「産業」の5分野から1つを選び、1年次は個人で、2年次は4～5人のグループで、テーマを決めて研究を行い、3年次には論文を作成する。

17年度には、学校教育目標を「吉田高校グラデュエーション・ポリシー（吉高ＧＰ）」として明文化。生徒は、高校3年間を通して、8つの力（自己肯定力、傾聴力、分析力、思考力、発信力、想像力、創造力、行動力）を身につけることを目指す。授業はもちろん、学校行事や部活動など、すべての教育活動における目標であり、富士山学においても、各活動で吉高ＧＰのどの力を育むのかを明確にした上で取り組ませている。

「富士山学」での対話を通じて、協働の意味を知った

上野　私たちの時の「富士山学」では、1年次は主にディベートを通して、地域や自分自身のことについて考えを深め、2年次の夏前からグループワークに取り組みました。「防災」を選んだ私のグループでは、富士山の噴火について調べました。

後藤　「産業」を選んだ私のグループは、テレビ番組で市の特産品であることを知った織物を研究テーマにしました。織物会社などを訪れて、インタビューを重ねながら織物についての理解を深めていきました。

上野　3年次には、各クラスから選ばれた代表グループが、体育館でポスターセッションをしました。グループのメンバーは4人しかいなかったので、「自分がやらなければ」と思って一生懸命取り組み、クラス代表になることを目指しました。何事も人任せにしない姿勢が身についたのは、富士山学のおかげです。

右 上野有生
うえの・ゆうき
高校2年生の時、生徒会長に立候補した。高校卒業後は、東京の寿司店に弟子入りし、寿司職人を目指して修業に励んでいる。

左 後藤大地
ごとう・だいち
高校時代は、生徒会副会長として、生徒会長の上野さんを支えた。教師を目指し、大学は教育学部に進学。

後藤　グループワークでは、「この人は、こんな考えを持っているんだ」といった発見がよくありました。その気づきを基に自分の考えを修正したことが、何度もありました。私は1人で動き回るタイプですが、「みんなで協力して活動するとは、どういうことなのか」を学びました。

上野　1年生の最初の頃は、円滑な話し合いができたことは少なかったと思います。でも、少人数のグループで活動する上で、「誰かが手を抜いたら活動は成り立たない」と考えていました。そうして、みんなで何度も話し合いを重ねていくうちに、他者の意見に耳を傾けつつ、自分の思いをうまく伝えられるようになりました。

後藤　そういった変化は、私たち全員に起きていたと思います。修学旅行の平和学習で、みんなが自分から意見を出して語り合った時のことを覚えている？　自分たちの住む場所から遠く離れている沖縄の問題についても、事実を調べ、分析して、自分の考えを持てていたよね。

上野　自分が住む町の象徴であり、日本人が皆、知っている富士山について深く学べたことも、富士山学に取り組んでよかったと思っている点です。私は今、東京の寿司屋で修業中ですが、お客様に山梨県出身だと言うと、必ず富士山の話になります。その時に、富士山学で学んだ富士山の歴史や富士吉田市の文化などを自分の言葉で伝えられるのは、誇らしく、またうれしい気持ちになります。

後藤　富士山は、校舎の4階の教室からきれいに見えます。そんなに身近にあるのに、知らなかったことがたくさんありました。だからこそ、富士山学にのめり込み、結果として様々な力を培うことができたのだと思います。

生徒同士で学校教育目標について話し合った

上野　私たちが2年生の時に掲げられた「吉高GP（グラデュエーション・ポリシー）」（**「吉田高校の探究学習　概要」参照**）も、自分の生き方に大きな影響を与えました。当時は、富士山学と吉高GPを関連づけたことはありませんでしたが、振り返ってみると、両者は深く関係していたのだと思います。

後藤　私もそう思います。グループワークにあてはめると、活動の方針を決めるために「思考力」を発揮し、動き出すためには「行動力」が求められました。地域の人たちへのインタビューの経験を通じて「傾聴力」が向上し、ポスターセッションでは「発信力」が養われたと思います。そして、最後までやり遂げたことで「自己肯定力」が高まりました。

上野　私は初め、8つの力を別々に捉えていました。でも、「発信」するためには、「傾聴」してインプットする必要があり、何を発信するのかを「思考」しなければならない。次第に、吉高GPは相互に関係し合っているのだと捉えるようになりました。

後藤　吉高GPを浸透させることを目的に生徒同士で語り合った「教育活動計画検討会」は、今でも忘れられない経験です（**本誌2017年8月号P13～17参照**）。学級委員であった私は2年生の代表として、他学年の代表と、授業や学校行事などが8つの力のうちのどの力と結びつくのかを話し合いました（**写真**）。

写真　後藤さんが参加した教育活動計画検討会。授業や学校行事など、それぞれの教育活動において、吉高GPの中のどの力が身につくのかを話し合った。

上野　私は、富士山学での研究テーマと吉高GPの関連を生徒同士で語り合った「GP集会」を、よく覚えています。私たちのグループは、「下校途中に突然、富士山が噴火し、周囲に助けてくれる人がいない中で、隣に大切な人がいたら、あなたはどうするか」といった場面を示した上で、吉高GPの8つの力が書かれたカードを2枚引き、カードに書かれた力を使ってどう対応するかを話し合い、その結果を発表しました。例えば、「行動力」と「発信力」が出たら、それらの力をどのように発揮するのかを、富士山学で学んだ防災への理解を基に考えるのです。吉高GPは、学校外でも生かされるということが腑に落ちた機会でした。

進路実現に必要な力をつけるべく、行動を起こす

後藤　吉高GPを意識するようになってからは、教科の授業だけでは育成される力に偏りが生じるため、探究学習や学校行事なども、8つの

探究的な学びは、
自分の気持ち次第で
いつでもどこでも
できるものだと
分かりました
後藤大地

自分に必要な力を
見いだし、
その獲得に向けて
行動できるように
なりました
上野有生

力をバランスよく身につける上でとても重要なのだと気づきました。教科の授業では発揮する場面が少なかった「発信力」や「行動力」、「自己肯定力」などは、富士山学でこそ磨けたからです。実は、高校卒業後も、何かをしようとする時、つい「吉高GPの○○力が鍛えられそうだ」と考えている自分がいます。

上野　私も、今でも吉高GPが自分の行動指標になっています。私は、小・中学校時代、自分から進んで何かをすることがほとんどありませんでした。でも、将来は寿司職人になるということだけは決めていたので、高校卒業までにもっと自立しなければならないという思いがありました。そのためには、「発信力」と「行動力」が必要だと考え、それを身につけようと、2年生の時に生徒会長に立候補しました。

後藤　上野くんが生徒会長に立候補した時には、とても驚きました。それまではリーダーになるタイプではないと思っていたからです。なぜそんなに変わることができたのかを知りたくて、僕も一緒に活動しようと思い、副会長になりました。

上野　生徒会長に当選して、校長先生に承認印をもらいに行った時、校長先生から、「上野くんが生徒会長の活動を通して、身につけたい吉高GPは何ですか?」と聞かれました。私は「発信力と行動力です」と答えました。そこで改めて、その2つを養おうと決意しました。

後藤　実際、上野くんはどんどん変わっていったよね。同級生のほぼ全員が大学進学を目指す中で、寿司職人への道を貫いたのは、簡単なことではなかったと思います。夢に向かって自ら行動していく上野くんの姿に、たくさんの刺激を受けました。

上野　現在、修業している店を初めて訪れた時、寿司がおいしいのはもちろん、親方の気配りが店の隅々まで行き届いていることに感動しました。どこを見られても恥ずかしくない店づくりに、ここで働きたいと思ったんです。すぐに弟子入りをお願いする手紙を親方に書きました。

後藤　私は、誰かの人生に影響を与える責任のある仕事をしたいと思い、中学校時代から教師になるのが夢でした。今、教育学部の2年生となり、教師の立場から探究学習を考えるようになりました。様々な力を関連づけて、スパイラル状に高めていくことができる探究学習に改めて魅力を感じ、その指導ができる教師を目指しています。

考え、動き続ければ どこでも探究はできる

後藤　新型コロナウイルスの感染拡大の影響で大学が休業だった期間は、教育関連のNPOや、甲府市の企業のインターンシップに参加しました。今できることは何か、そしてそれを自分の人生にどう生かすのかを考えながらの学外活動でした。富士山学では、探究のベクトルが外に向いていましたが、今は探究のベクトルが自分の内側に向いているようです。自分の中で、「これがしたいのかな」「でも、これではないな」と探究しているうちに、自分が進むべき道を見いだせると思っています。

上野　外出自粛のため、お客様の数は少なくなりましたが、私がすべきことに変わりはありません。仕込みの量が少なくなったことでできた時間を、自分なりの工夫をする時間に充てています。修業2年目となり、玉子を焼かせてもらえるようになりました。昨日焼いたものと今日焼いたものでは何が違うのか、毎日、研究しています。

後藤　上野くんの話も、探究的な学

びが学校の外でも生かされるということだよね。私は、吉高ＧＰは、「生きる力」だと思っています。卒業した今も、すべての自分の活動の指標に８つの力を据え、この力を伸ばすためにこんな活動をしようと計画します。先が見えない時こそ、自分のあり方が問われているように思いますし、今回の新型コロナウイルスの感染拡大のような思いもかけない事態では、自分で考えて行動できる人と、そうでない人とでは、得られるものは大きく異なるでしょう。不測の事態であっても、その時にできることを考えて、成長の機会にすることが大事なのだと思っています。

上野　私もそう思います。飲食業界は厳しい状況となっていますが、「寿司を極めたい」という思いに変わりはありません。弟子入りする際、親方から「一人前になるには10年かかる」と言われました。寿司職人の修業はゴールの見えない探究です。誰かに教えてもらうのではなく、親方や先輩の姿を見て技を盗んだり、本で読んだことを試して体得したりします。自分の力でしか、自分の夢はかなえられません。勉強と失敗を繰り返しながら、改善点を見つけて、成長していきたいと思っています。

生徒の成長を見つめて

高校は通過点、社会で生きる力を学校教育で養う

山梨県立吉田高校　校長
古屋勇人（ふるやはやと）

富士山学は、15年以上続く、本校伝統の探究学習です。段階的に取り組む時間を増やし、今は、３年間を見通した系統的なカリキュラムに基づいて進めています。そして、２０１７年度から生徒と一緒に練り上げた吉高ＧＰは、現在、本校の教育活動全体に浸透しています。富士山学も、吉高ＧＰと連動させた活動にしています。上野さん、後藤さんのような吉高ＧＰ１期生が、ＧＰ集会などに積極的に取り組んでくれたおかげで、今の本校の姿にまで成長することができました。

「卒業した今も、吉高ＧＰが活動の指標になっている」という２人の言葉は、心強いものでした。高校は、人生の通過点です。私は、高校での学びが社会で活躍するための基盤となることを願っています。そうした意味で、２人の話から、吉高ＧＰが人生の糧になっていると手応えを感じることができました。

今後は、８つの力に限らず、自分にとって必要なＧＰを見いだせるような主体性が芽生える教育活動を実現したいと考えています。本校の生徒たちが、２人のように、自分に必要なＧＰを見いだし、それを身につけられるような支援をしていきます。

自分に必要な学びを選び取る力を育みたい

山梨県立吉田高校　教頭
廣瀬志保（ひろせ）

学習の重要なプロセスには習得・活用・探究がありますが、教科の授業では、習得・活用までは行えても、探究までは行き着けないことが少なくありません。その意味で、富士山学で行う探究は、大変重要です。教科を横断した探究の経験から、生徒は多角的に思考し、議論の場では活発に意見を交わしていました。例えば、「学園祭では、どういう力をつけるか」ということを、教師だけでなく、生徒と話し合えたことは、学校行事の目的を改めて問い直す上で大きな意味がありました。

富士山学やＧＰ集会を通じて、生徒は探究する姿勢を身につけ、自分に必要な学びを選び取る力も磨いていったのではないかと感じています。例えば、上野さんは、３年次に「フードデザイン」という選択科目を履修していました。調理実習で作った料理を私たちに試食させてくれたのですが、上野さんの料理は、その一つひとつにコンセプトがありました。家庭科の教師と授業の数日前から話し合ってメニューを決めて、準備をしていたそうです。寿司職人になるという目標に向かって、料理の中で試行錯誤することを学び、吉高ＧＰの８つの力で言えば、「創造力」などを高めていったのだと思います。

安心感があってこそ、試行錯誤し、挑戦できる

山梨県立吉田高校
木下花子

上野さん、後藤さんとは２年間、担任や富士山学担当としてかかわりました。２人とも当時から、「吉田高校は好きなことに挑戦でき、先生は私たちの背中を押してくれる」と言っていました。改めて振り返ると、２人は学校に安心感を抱いていたからこそ、何事にも主体的に臨めたのだと思います。

２年生になって上野さんが生徒会長に立候補したと聞いた時、私は少し心配になりました。自分の思いや考えを表現することが苦手な印象があったからです。しかし、それは杞憂に終わりました。上野さんは、自分の将来に向けて、生徒会長としてどんどん行動していきました。進路を決める際には、寿司屋の親方に宛てた手紙を、私に見せてくれました。心のこもった素晴らしい内容で、行動力と発信力の定着を確かに感じました。

後藤さんは、修学旅行の平和学習を引っ張ってくれました。沖縄の基地問題といった難しいテーマでも、生徒たちが活発に意見を出して話し合う姿に感動しました。それは、後藤さんが富士山学の中で、８つの力を総合的に身につけ、それらを発揮すべく平和学習の対話に臨んだからこそ実現したのだと思います。